



Title	預言者エレミヤと申命記
Author(s)	菅沼, 英二
Citation	基督教学, 24, 33-36
Issue Date	1989-07-05
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/46477
Type	article
File Information	24_33-36.pdf



[Instructions for use](#)

預言者エレミヤと申命記

菅 沼 英 二

I. 研究史概観

問題提起

エレミヤがBC六二七年に預言者の宣教活動を始めたが、その五年後のBC六二二年にヨシヤ王の申命記による宗教改革が行なわれた。この重大な局面において、若い預言者エレミヤは申命記改革に対してどのように反応したのであるか。このような問題提起が A. Condamin⁽¹⁾ によってなされて以来、「預言者エレミヤと申命記」の問題は旧約聖書研究において、最も興味ある問題の一つとなった。⁽²⁾

一、否定的立場

預言者エレミヤが申命記に対して否定的立場に立つてきたとする考えは Duhm, Marti, Cornill, Kennett, Holscher, Welch⁽³⁾ に見られる。彼らはエルサレム神殿集中礼拝に関する申命記の理念とエレミヤの理念とが相互

に相反していると考えている。(エレミヤ八の八参照)

二、肯定的立場

預言者エレミヤと申命記との関係が肯定的であったとする考えは S. R. Driver, Peake, H. H. Rowley, Rudolph, von Rad⁽⁴⁾ に見られる。

S. R. Driver はエレミヤ書、特にその散文体に申命記との共通した用語(法)を見出した(特に申命記四章と二十八章に)。

三、肯定から否定への変化を見る立場

預言者エレミヤが申命記改革当初それを支持していたが、後に祭儀と神殿に批判的になることによって、申命記とも肯定的関係から否定的関係へ変化したという考えは J. Skinner⁽⁵⁾ に見られる。

四、S. Mowinckel の貢献

モーヴィンケルはエレミヤ書の資料分析をなし、A、B、Cの三つの資料に分類した。

Aはエレミヤの真正な預言集で詩文である。

Bは伝記者による伝記的散文集

Cは申命記的記者による記述(散文・詩文)

モーヴィンケルはエレミヤ書と申命記との共通の記述資料を申命記的記者によるものと考え、Rudolphや

T. H. Robinson によつて支持された⁽⁶⁾。

五、von Rad の貢獻

von ラートは申命記全体がシナイ契約伝承の上に立っており、エレミヤもシナイ契約伝承を継承して宣教している以上、両者は共にシナイ契約伝承の流れに立っている点において共通していることを認めている⁽⁷⁾。

これまでの研究史の上に立って、預言者エレミヤと申命記との関係を再検討しなければならぬ。従つて、資料分析の成果を認めつつ、エレミヤの真正の預言詩と原申命記 (Ur-deuteronomium)⁽⁸⁾ を通して、両者の関連を考察したいと思う。

II. 預言者エレミヤと申命記

A. 発見された申命記とエレミヤ

ヨシヤ王の治世十八年 (BC 六二二、二一) に (原) 申命記がエルサレム神殿において発見された (列王記下二二・三、歴代誌下三四・八)。他方エレミヤはヨシヤ王の治世十三年に啓示の言葉を受領し、預言者活動を始めていた (エレミヤ一・二)。従つて、預言者エレミヤは (原) 申命記の発見を知つていたと考えられる。エレミヤは発見された (原) 申命記とどのようにかかわつた

であろうか。エレミヤの告白⁽⁹⁾の中でその関係の確証をえることが出来る。

「あなたの御言葉が見いだされたとき、わたしはそれをむさぼり食べました」

(エレミヤ一五・一六 新共同訳聖書)

ヒブル語原典では「み言葉が発見された時」で、原申命記が発見された時を示唆しています。

事実、旧約聖書の中で、「言葉」と「発見」との二つの言葉が一緒に述べられている箇所は、列王記下二二・一三「発見された書 (律法の書) の言葉」、列王記下二三・二「主の神殿で発見された契約の書の言葉」で、共にエルサレム神殿で発見された (原) 申命記の言葉を示している⁽¹⁰⁾。

ここでエレミヤの独自性は、(原) 申命記の言葉を単に「記述された契約の書の言葉」としてでなく、「生ける神の言葉」の啓示として受け、それを「むさぼり食べ」、自分の血とし肉とし、「喜びとし、心の楽しみ」としたことである。

B. 申命記を発見した人々とエレミヤ

エルサレム神殿で申命記を発見した人々は「アザリヤの子である書記官シャパン、(大) 祭司ヒルキヤ、シャ

パンの子アヒカム、王の大臣アサヤ」(列王記下二・三、八、一一、歴代誌下三四・八、一九)である。これらの人々とエレミヤとはどのような関係にあったであろうか。

エレミヤはエルサレム滅亡後の危機的な状況の中にあつた時、「ミッパへ行きアヒカムの子ゲダリヤの所へ行って、彼と共にその地に残っている民のうちに住んだ」(エレミヤ四〇・六)。このゲダリヤは「シャパンの子アヒカムの子」(エレミヤ四〇・五)である。(原)申命記を発見した人々とエレミヤは親しい関係、深い信頼関係にあつたのである。彼らはエレミヤと共に「シナイ契約伝承を担った人々であつた」とする関根正雄先生の学説に同意したいと思う。

C. 預言者エレミヤと神の言

預言者エレミヤは発見された(原)申命記の言葉を通して「神の言」を啓示として受け、それを「むさぼり食べる」ほどに読み、預言者の生命の糧とした。

「人はパンだけでは生きず、人は主の口から出るすべのことばによつて生きる」(申命記八・三)というみ言葉を讀んで、エレミヤは「神の召命」を受けた。

人々が「主の口から出る言葉によつて生きる」ために

は、主の口となる人間を神は必要としておられる。

かくして預言者エレミヤは神の言葉を語るべき「神の口」とされた。エレミヤの告白の中に、「神の口」となるためのエレミヤの苦闘を見出すことが出来る(一五・一九)。

預言者エレミヤは申命記伝承に立ちながらも、彼自身の生ける神に対する預言者の信仰経験によって、その伝承を越えているのである。

III. 預言者エレミヤと申命記と貧しい人々

預言者エレミヤはヨシヤ王の申命記改革とその政治を賞賛した。

「あなたの父(ヨシヤ王)は公平と正義を行つて、幸いを得たではないか。彼は貧しい人と乏しい人の訴えをただして、幸いを得た。こうすることが神を知ることではないか」(エレミヤ二二・一六)。

申命記では「貧しく、乏しい人を虐待してはならない」と教えている(二四・一四)。それがシナイ契約の伝統であつた(出エ二二・六、九、詩七四・二二)。預言者エレミヤは申命記伝承に立ち、貧しい人・乏しい人の幸わせを願つたのみならず、そのことによつて「神を知る」

という神との生ける交わりに生きる信仰の終末的実現を重視したのである(エレミヤ三一・三四「小から大に至るまで皆わたしを知るようになる」)。

IV. 申命記から新しい契約へ

預言者エレミヤはヨシヤ王の死を悲しみ、「ヨシヤ王の死のために哀歌を作った」(歴代誌下三五・二五、エレミヤ九・一七—一九)、BC六〇九年のメギドの戦いにおけるヨシヤ王の戦死(列王下二三・二九)によって、ヨシヤ王の申命記改革は半ばにして終った。

預言者エレミヤは原申命記に対して、単に反対や否定したのではなく、その申命記改革の限界を超え、エルサレム滅亡(BC五八七年)の悲劇を契機として、申命記的信仰伝承の終末的実化を目指し、「新しい契約(三一・三一—三四)」への道を切り開くに至ったのである。

註

- (1) A. Condamin, *Le Livre de Jérémie* Paris, 1920.
- (2) H. Cazelles, *Jérémie et le Deuterome*, 1951.
Jeremiah and Deuteronomy (E.T., 1984).
- R. Davidson, *Orthodoxy and the Prophetic Word*, VT 14, 1964.
- J. P. Hyatt, *Jeremiah and Deuteronomy* JNES 1, 1942.
- (3) B. Duhm, *Das Buch Jeremia* (KHC), Göttingen, 1901.

C. H. Cornill, *The Book of the Prophet Jeremiah* (ET) 1905, Leipzig.

A. C. Welch, *Jeremiah*, Oxford 1928.

(4) S. R. Driver, *Deuteronomy* (ICC) Edinburgh, 1902.

A. S. Peake, *Jeremiah* (Cent.-B) Edinburgh, 1912.

H. H. Rowley, *The Prophet Jeremiah and the Book of Deuteronomy* 1950. (Th. H. Robinson-Festschrift)

G. von Rad, *Studies in Deuteronomy* (ET) SCM, 1953.

(5) J. Skinner, *Prophecy and Religion*, Cambridge, 1963.

(6) S. Mowinkel, *Prophecy and Tradition*, 1946.

W. Rudolph, *Jeremia*, HAT, 1947.

T. H. Robinson, *Baruch's Scroll*, ZAW42, 1924 pp. 209-221.

(7) G. von Rad, 「旧約聖書神学」Ⅰ、Ⅱ(邦訳一九九〇)。

(8) E. W. Nicholson, *Deuteronomy and Tradition*, Oxford, 1967.

(9) 以下では原申命記を申命記中の単教記述部分と見なす。

鈴木佳秀「申命記の文献学的研究」教団出版局、一九八七。

エレミヤの七つの告白録：一・一八—二〇、二二—二六、一五—一〇—一二、一五—二二、一七—二二—一八、一八—一八—二二、二〇—二二—一八。

(10) W. L. Holladay, *Jeremiah* (Hermeneia) Vol. (1-25) 1986.

(11) 関根正雄「エレミヤにおけるダビデ契約とシナイ契約」(イスマエルの思想と言語)一九六二)。G. von Radは「旧約聖書神学Ⅱ」以下の関根学説を引用紹介している。

(12) N. W. Porteous, *Living the Mystery*, Edinburgh, 1967. pp. 55-59.